

## 地域を担う水田畑地化によるさくらんぼ団地

所在地 天童市大字成生 9 1 8  
 集団名 大町さくらんぼ生産組合  
 組合長 武田 章

### 1 組織の概要

(1) 設立年月 昭和 6 3 年 9 月

(2) 構成戸数及び経営規模

	総数	~0.5ha	~1ha 未満	1~3ha 未満	3~5ha 未満	5ha~	1戸平均 ha
専業	10		2	7	1		1.88
第1種兼業	2	1		1			1.18
第2種兼業							
非農家							
計	12	1	2	8	1		1.76

(2) 労働力構成

性別	男 (歳)					女 (歳)					合計
	~29	30~ 49	50~ 64	65~	小計	~29	30~ 49	50~ 64	65~	小計	
構成員		3	7	2	12						12
〃の家族	1	1	0	4	6		4	6	6	16	22
雇用人					0					0	0
臨時雇用 延べ	270人・日					1,100人・日					1,370

(3) 組織の特徴

大町さくらんぼ生産組合は、2.7haの水田転作団地を畑地化し、12名により「さくらんぼ」生産を行っている。

昭和63年、水田転作について地域内での話し合いを進める中で、地域で有利な転作作物としてさくらんぼの導入を目指す12名が組合を設立し、地区内の水田2.7haを畑地化し、団地を造成した。団地化にあたっては、さくらんぼによる新しい農業に取り組もうとする意欲のある後継者たちが手をあげた。地域では彼らを支援するため、およそ40名いた地権者が農地集積に協力した。当時、自分の水

田に果樹を転作作物として植栽する事例はあっても、地域でまとまって団地化に取り組む事例は、天童市成生の大町が県内で先駆けであった。



さくらんぼ団地全景

さくらんぼ団地は、大雨で水が揚がりやすい条件不利地であ

ったことから、畑地化のための条件整備とともに、台木には水田転作に適した樹勢の強いコルト台木を選定した。また、仕立て方は管理作業がしやすいことから主幹形とし栽培に取り組んできた。コルト台のさくらんぼ団地では日本一を誇っている。

一方、当初わい性として導入されたコルト台木のさくらんぼは、樹勢が強く栽培管理が難しい等の欠点があった。これらの欠点を克服するため、講習会や早朝ミーティングの実施等、組織をあげて管理技術の向上に取り組んできた。その結果、コルト台木の特徴を活かした、大玉で糖度が高く品質の良いさくらんぼが安定して生産できる技術を確立した。

また、平成9年からは、さくらんぼによる有利な経営を目指し、園地の一部は観光もぎとり園とし、付加価値の高い農業の実現を図っている。地区内で初めての観光もぎとり園であり、周辺農家から注目されている。観光もぎとり園では、園地への進入路や園内の段差をなくし車椅子でも利用しやすいように工夫を凝らしている。

消費者に信頼される安全・安心な農産物の生産に向け、環境にやさしい農業の推進に取り組んでいる。組合員のうち7名はエコファーマーに認定されている。栽培管理の統一を図り、栽培管理記録簿への記帳を行いながら、安全・安心農産物生産体制構築支援事業による安全農産物出荷集団・出荷前残留農薬分析に参画し、消費者を意識した栽培を心がけている。

平成8年からは、明治大学農学部の「ファームステイ研修」の受け入れを行っており、毎年、15名ほどがさくらんぼの収穫期に組合員の自宅にホームステイしている。初めての農業体験をした学生は、「農家の大変さがはじめてわかった。」などの感想を述べ、農業への理解を深めている。

#### (4) 集団活動を行っている地域

天童市成生地区

#### (5) 集団活動の内容

ア 県内に先駆けて水田畑地化によるさくらんぼ団地の造成

・地権者や地域との協力による農地の集積

イ 安全、安心で高品質な「さくらんぼ」安定生産への取り組み

・定例会、講習会の開催

・栽培の統一、栽培履歴の記帳

- ・防霜ファン利用による霜害対策、ポリネーションによる結実確保
- ・灌水施設の導入とその活用による適正生育確保
- ・ビニール、防鳥網設置等の共同作業による省力化
- ・環境にやさしい農業の実践（エコファーマー取得7名）
- ・安全・安心農産物生産体制構築支援事業（安全農産物出荷集団、出荷前残留農薬分析事業）への参画

#### ウ 顔の見える農業の取り組み

- ・園地の一部を観光もぎ取り園として利用。
- ・直売による顔の見える販売活動。
- ・パンフレット作成等による取り組みのPR。

#### エ 明治大学「ファームステイ研修」の受け入れ

- ・学生の組合員宅でのホームステイと農作業体験研修受け入れによる農業理解の醸成。

### （6）基幹作物

#### さくらんぼ

## 2 集団所在地域の概況

成生地区は天童市北部に位置し、北は東根市と境を接している。地区内には最上川の支流である押切川、乱川が流れ、この二本の川の扇状地に形成される平坦な沖積土地帯が農地として利用されている。また、これらの川は伏流水を湧出し、清流に住む様々な生き物の命を育てている。中でも絶滅危惧される繁殖期に巣作りをする川魚「イバラトミヨ」の数少ない生息地でもある。

気候は内陸性気候の特色を持ち、年間平均気温は約11～12℃、年間降水量が約1,100mm、年間日照時間が約1,800時間と比較的温暖であり、雪国といわれる山形県内では最も雪が少なく自然に恵まれ果樹栽培に適した地域である。

交通は、平野部の中央を奥羽本線・国道13号線・新たに東北中央自動車道が開通し縦貫している。東には仙台市に通じる国道48号線、西に主要地方道天童大江線が伸び、社会経済活動の大動脈を形成している。また、山形空港や東北中央自動車道天童インターチェンジに隣接しているなど、本格的な高速交通網に組み入れられてきている。

成生地区の農業については果樹を中心とした水稻複合経営地帯である。経営耕地の種類別構成比をみても水田39.2%、普通畑3.9%、樹園地56.9%で樹園地の割合が高い。主力の果樹については水田、普通畑の面積が減少する中、果樹の面積は増加傾向にある。品目では「さくらんぼ」、「西洋なし」、「もも」の面積が増えている。

(2) 所在地略図



3 農業生産の状況

(1) 農業生産高(平成15年)

販売額単位：千円

主要農産物、加工品	市 町 村			集 団		
	販売量	単位	販売額	販売量	単位	販売額
さくらぼん	2,200	t	3,381,400	28,970	kg	66,320

注) 市町村販売量は「山形農林水産統計年報(14~15年)」より、集団は全面積における実績(推定)

(2) 農業・加工生産の推移

	種類別	12年	13年	14年	15年	備考
さくらぼん	作付面積(団地)	270	270	270	270	単位：a
	単価	2,360	2,327	2,366	2,469	単位：円
	販売額	36,319	36,761	37,047	39,339	単位：千円
	もぎ取り入場者数	3,320	3,040	3,810	5,170	単位：人

注) 単価、販売額は組合からの聞き取り及び農協の販売実績等を参考に推定(観光もぎとり園含む)

## 4 発展の経過と活動内容

### (1) 集団化の背景と契機

成生地区では、昭和40年代に水田の基盤整備が行われ、水稲+果樹の複合経営が主体であった。水稲の生産調整の拡大とともに、徐々に果樹の作付けが増加し、市内でも果樹栽培の盛んな地域となった。

昭和62年、水田農業経営確立前期対策により、水稲生産調整面積が急激に拡大し、その対応が求められていた。地区に割り当てられた転作をどのように進めるかについて話し合いが進められた。

天童市内では、転作の対応として、ブロックローテーションによる大豆や小麦の栽培が盛んに行われており、地域での転作のあり方として、転作地を固定するかブロックローテーションにするかが論点であった。

度重なる検討を重ね、転作地の条件整備を図り、より収益性の高い作物を導入することが有利であるとの結論に達し、将来の農業に意欲的な12名が団地化による「さくらんぼ」の導入を図ることとなった。

### (2) 発展の経過

#### ア 地域リーダーの活躍

昭和62年、当組合の初代組合長は、転作のまとめ役であった地域実行組合のリーダーを務めていた。

「転作地を団地化しさくらんぼを植えよう。」

地域の農家に有利な転作を行うため団地化した土地で「さくらんぼ」の栽培を行うことを提案した。成生地区は、県内でも有数の果樹産地であり、栽培技術を習得していたことやさくらんぼの将来性を見越してのことだった。

本当にさくらんぼ団地がつくれるか。まずは栽培する人を募った。「1戸当たりの面積が少ないと中途半端な管理になってしまい失敗する。1戸20aぐらいは必要。」リーダーのことは、果樹中心の経営を目指そうという11名が名乗りをあげ、リーダーとともに12名で「さくらんぼ」の栽培を始めることを決めた。

どのようなさくらんぼ栽培にするか、団地の場所をどこにするか、土地をどのように集積するか、毎晩のように集まってはリーダーを中心に夢を語り合った。

#### イ 「大町さくらんぼ生産組合」の設立

昭和63年9月、12名により大町さくらんぼ生産組合が設立された。

永年性作物である「さくらんぼ」を作付けすることから、農地の貸借では団地内の土地所有者から理解がなかなか得られないため、組合員の自作地とすることとした。

自作地とするために、団地内の農地の所有者のみならず、団地外の農地の所有

者も交え、交換分合や売買等により集積することとした。当時およそ40名いた地権者の農地の売買による税金や登記費用など関係農家の負担が大きく、集積には多くの苦労があった。初代組合長は集積を進めるなど多くの業務に対応するため、勤務していた会社をやめ、「さくらんぼ団地」に奔走した。地道に関係農家へ足を運び理解を求め、数年間にわたる苦労の末に12名への集積を完了した。

## ウ さくらんぼ園の造成

地区内水田のうち、どの場所を転作地として団地化するか、さくらんぼを植えるにはどの場所がいいかについて地区内で検討が続けられた。3ヶ所の候補地について、土壌調査を行い、最も「さくらんぼ」の栽培に適すると思われる場所を選定した。しかし、その場所は最上川と押切川の合流点近くにあり、川が増水すると水の揚がる場所であった。

そうした悪条件でのさくらんぼ栽培を成功させるため、水田農業確立対策推進事業、おうとう品質向上事業を活用して、整地や深耕、暗渠排水の設置など条件整備を図り、平成元年3月、水田転作地での栽培に適する「コルト」を台木とする苗木1,500本を植えた。

管理作業の基本は組合員単位に行うことを考え、各組合員の所有面積に応じて列単位で区分できるように苗木の植え付け時には、1組合員当たり4または5列単位になるように列幅を加減して植え付け、作業しやすいように工夫した。



さくらんぼ苗木の植え付け

## エ 結実安定に向けた苦労

コルト台木は樹勢が強いため、なかなか結実しなかった。安定した結実を確保するため様々な技術を駆使し樹勢の安定を図り結実を見ることとなった。

一方、さくらんぼ団地は霜の常習地でもあった。そのため、防霜対策に効果があるとして注目されていた防霜ファンを平成5年に導入し被害の防止を図っている。

雨よけテントは、団地であることから50連棟となっている。雨よけテント1棟につき2ヶ所の換気口を設置し、ビニール被覆後の高温対策を図っている。ビニール被覆や防鳥網の設置を共同で行っているが、連棟であるうえ、ハウス規格が統一されていることから効率的な作業が可能となっている。

## オ 大学生の農業体験研修の受け入れ

平成8年から、明治大学で授業の一環として実施している「ファームステイ研修」の受け入れを行っている。毎年、さくらんぼの収穫期に15名程度の学生を受け入れ、農作業の体験や組合員宅へのホームステイを通じ、農業に対する理解を深めている。これまでの受け入れ学生数は延べ150名ほどになり、研修を終えた学生たちは、就職してからも手伝いに来るなど、第二のふるさととして山形県農業の応援団的な存在になっている。

## カ 高品質果実を有利販売

コルト台木で生産されるさくらんぼは、大玉で揃いの良い高品質の果実が生産される。そのため、秀品率が高く、有利な販売が可能となっている。直売なども実施しているが、より高品質のものを市価よりも安く提供し喜ばれている。大玉で高品質であることや直売の実施により全体の販売単価はJAの平均単価を大きく上回っている。

## キ 観光もぎとり園の開始

平成3年7月に山形自動車道が整備され寒河江から村田ジャンクションまで開通し、広域からの観光集客性が向上した。また、平成14年9月、東北中央自動車道の一部開通（山形上山～東根）が予定されるなど観光もぎとり園のニーズが高まることが予想された。一方、経営の発展方向を考え、生産した「さくらんぼ」を単に販売するだけの経営から、より有利で楽しい経営を目指そうと、観光もぎとりを開始することとした。園地への進入路や園内の段差をなくし、障害者の方も無理なく利用できる観光もぎとり園にしている。

## (3) 現在の活動内容

### ア 後継者中心の取り組みに

新たな団地化に意欲的に取り組んだ12名は、「さくらんぼ団地」を経営の柱としながら個々に経営発展を成し遂げ、現在は、その後継者が経営主として活躍している。「さくらんぼ団地」の取り組みが後継者の育成にも結びついている。

### イ 拡大する観光もぎとり園

平成9年から開始した観光もぎ取り園は、JAてんどう推奨園のひとつとして、大玉のおいしい「さくらんぼ」がもぎ取りできるとして訪れた観光客からの評判も上々で、毎年ここを訪



観光もぎとり園 開園式

れる常連客も増えてきている。また、入場者数の増加とともに、直売も増加している。観光もぎ取り園で消費者と直に接し、様々な対話のなかから消費者のニーズに対応した、生産・販売活動を展開している。

## ウ 環境にやさしい農業を目指して

農薬や化学肥料の使用を減らすなど、環境にやさしい農業の推進に積極的に取り組み、消費者に信頼される「さくらんぼ」生産に努めている。組合員のうち7名が持続的な農業生産技術の導入により平成15年度にエコファーマーの認定を受けた。

## エ 顔の見える農業に取り組む

自分たちが丹精込めて生産した農産物を消費者にもっと理解してもらい、たくさん食べてもらいたいとの思いから、村山総合支庁の戦略プロジェクト「顔の見える農業展開事業」を活用し、組合員の顔写真とメッセージ入りのパンフレットを作成し、来園者への配布や宅配便にのせるなどPR活動を行っている。生産者の姿を情報発信することにより、消費者との関係が身近なものになり、生産に対する責任の重さを痛感する一方で、より安全・安心な農産物を生産者に届けることの重要性を認識する機会にもなっている。



生産者情報の発信

## 7 集団と地域、集落などの関わり

成生地区農業の中心となる担い手として地域農家からの絶大な信頼を得て、農地の提供を受けて団地化に取り組んできた。地域転作の担い手としての位置づけでスタートしたが、現在はその団地を中心にしながら個々の経営を発展させ、地域農業全体の中核として活躍している。



視察者が絶えない

組合員12名のうち6名は認定農業者であり、さくらんぼのみならず、その他の果樹生産組織等のリーダーとして活躍しており、集落や地区を超え、天童市をリードする組織となっている。栽培技術

レベルも高く、周辺農家の指導的役割も担っている。

農繁期には、地区内住民に加え周辺市町からの雇用など就労の場を提供している。

## 8 経営及び技術等の創意工夫について

### (1) 経営及び技術的な特徴

#### ア 水田畑地化を進めるための土壌管理

団地の場所は、最上川のほとりの低地で豪雨の際は浸水する地帯であったことから、土地基盤整備の際には、暗渠を樹列毎に設置し排水対策を実施している。

また、樹冠が拡大して結実するようになってからは、毎年秋に、土壌改良機(グロースガン2台を使用)により地中に圧縮空気を送り、酸素供給と耕盤破碎を行い、下層土の改善を実施している。

施肥については、土壌分析の結果に基づき、植栽してから数年間は土壌改良材を主体とし、N成分は無肥料とした。現在は組合員毎に、樹勢や結実量に合わせた施肥を実施している。

#### イ コルト台木のさくらんぼを導入

当組合で運営している2.7haのさくらんぼ団地では、水田転作に適した樹勢の強い台木であるコルト台木を選択し、植栽している。当時、コルト台木を導入した理由は、組合員の中でその4～5年前にコルト台木のさくらんぼを植栽したところ、その果実が大粒で美味しく、しかも果実の大きさが揃っていることから栽培しようということになった。栽培の目標については、L玉と2L玉を合わせた割合を80%以上、糖度20%以上とし、高品質果実生産に努めている。しかし、コルト台木のさくらんぼは樹勢が強く、結実が安定するまでは、大変苦勞し、せん定方法の統一、新梢伸長抑制剤(バウンティフロアブル)の利用(以後、バウンティ処理)や断根処理等により樹勢を落ち着かせ、マメコバチの増殖やミツバチ群の設置等により結実対策を実施し、現在では収穫量は600kg/10aと安定してきている。

また、樹勢の強いコルト台木のさくらんぼを導入したことにより、結果的に湿害に強く、平成9年、10年の大雨の際に園地内に浸水したが、現在欠木は1本も見られていない。



主幹形のさくらんぼが整然と並ぶ園地

#### ウ 主幹形を維持し作業効率をアップ

仕立て方は主幹形で、10a当たり50本の割合で植栽している。側枝をコン

パクトにし、樹形を維持している。主幹形は、列毎に管理作業がしやすく、高所作業台車を利用することによりさらに作業効率を高めることができる。また、この仕立て方は、もぎとりする際に子供からお年寄りまで収穫しやすいと大変好評を得ている。

本年で16年生となる主幹形を維持しているポイントとしては、収穫後にバウンティ処理していることと平成10年に断根処理を実施したことがあげられる。バウンティ処理は、10年ほど前に農業登録されてから継続して実施しており、この散布により、側枝及び結果枝の拡大を抑え、コンパクトな側枝を形成することができている。断根処理は、バックホーを使用して行った。コルト台木は上根の量が多く樹勢が旺盛であることから、大胆な断根処理を実施することにより、樹勢を落ち着かせ花芽の着生と充実を図ることができた。また、それでも収穫前に新梢が伸びている場合は摘芯処理を組み合わせしており、結実は年々安定してきている。

## エ さくらんぼを成らせるための管理作業

品種構成は、佐藤錦75%、正光錦25%であり、佐藤錦3列に正光錦1列の割合で列毎に同一品種を植栽している。受粉樹が25%確保されているが、それでも年によって結実に振れが見られるため、現在、紅秀峰の高接ぎを実施し受粉樹の増殖を進めている。

春の晩霜対策としては、平成5年に防霜ファン24基を導入し、平成6年から稼働している。毎年3月中旬になると組合員全員でファンの点検を実施し、4月からの稼働に備えている。平成16年は防霜ファンの効果が特に高く、結実は良好であった。



ずらりと並んだ雨よけテントと防霜ファン

訪花昆虫は、マメコバチの増殖を図るとともに、ミツバチ群を12群設置している。また、結実の特に不安定な樹を中心に人工受粉も実施し始めた。近年は、「さくらんぼを成らせるためにできることは何でもやる」を合言葉に結実確保に力を入れている。

## オ 組合員の果樹経営の安定

「儲かる果樹農業」を期待して、さくらんぼの団地化に挑戦し16年を経過している。現在は結実が安定することにより、団地からの所得は向上してきている。

また、組合員は、団地以外にも果樹を栽培しており、団地での管理作業を通してタイムリーな情報交換を行うことができ、各自の圃場管理にも大いに役立ち、経営の安定に結びついている。

さらに、平成9年から取り組んでいる観光もぎとり部門では、消費者と顔の見える販売が可能となり、生産意欲の向上につながっている。特に奥さん方女性部が、接客や販売面で生き生きと活躍している。

## (2) 集団運営上の特徴

### ア 信頼されるリーダーの存在

農地の交換分合や売買により自作地とし、団地化をまとめることは、今後水田畑地化を進めていくうえで避けられない大きな壁になっていると思われる。天童市成生地区で16年前に大町さくらんぼ生産組合が設立された背景には、地域を任せられ、信頼されるリーダーが存在したことを特記したい。農地の交換分合や売買等の手続きに丸3年を要したこと、冬期の仕事を辞めて組合員や地権者等に足を運び理解を求めたことなどからも、そこには、組合員はもとより地域内の地権者等関係者との信頼関係がしっかり築かれていた。

### イ 定例会の開催

植え付けてから数年間は、毎月2日と日を定めて、朝6時に圃場に集合し、当面の防除やせん定等栽培管理作業の打ち合わせを行い、管理作業の統一を図った。現在では、防除情報等チラシの配布により作業の統一を図っている。また、総会は毎年3月2日に実施している。



せん定講習会

### ウ 管理作業の統一

防除は、JAの防除暦に従い実施し、殺ダニ剤等の特別散布が必要な場合は防除情報チラシを組合員に配布して、2～3日の間に防除するように徹底を図っている。

雨よけテントの防鳥網の設置及び撤収は、日を決めて一斉作業することにより効率を高めている。

### エ 販売対策

収穫したほとんどのものは、JAてんどうに出荷している。また、平成9年からは、観光もぎとり部門を立ち上げ、現在ではシーズン5,000人の来客を受け入

れるまでになった。その入園については、JAを通して受け付けており、お土産等についてもJAを通し販売している。

#### オ 大学生の「農業体験学習」の受け入れ

平成8年から大学生(明治大学)の「ファームステイ研修・天童実践」を受け入れ、本年で9年を経過した。12名の組合員の自宅に1人ないし2人の学生を1週間受け入れ、民泊させ朝仕事から夜まで家族と同じ農作業を体験してもらっている。



大学生の農業体験学習

### 9 今後の発展方向

平成9年から開始した観光もぎとり部門の来客数は順調に増加しており、今後は、観光もぎとり部門の期間拡大を図るため、優良な晩生種である「紅秀峰」の高接ぎを実施し、早生から晩生までの品種をラインナップしていく。

また、さくらんぼだけのもぎとりから直売店での販売、贈答用の産直などのほか、組合員のももやりんごのもぎとりまで拡大して、年間を通して安全・安心な果物を消費者に届けていきたい。観光もぎとりと直売部門の確立により、消費者と会話をしながら、生産者の顔の見える関係を築くことで、組合員の果樹農業への意欲も高まってきている。

現在、県をあげて米政策改革に対応し園芸作物の振興を進めている中で、当組合の取り組みはまさに時代を先取りしたモデルであり、今後水田畑地化を推進する上でも大いに参考となる成功事例である。当組合においても、消費者との交流を大切にしながら、消費者ニーズを的確に把握し、新たな団地化を進めるなど、果樹経営基盤の強化を図っていきたい。